27PB-pm243

サンシュユ（山茱萸）の基原再考

〇木下 武司[1]（[1]帝京大薬）

【目的】局方はサンシュユの基原をミズキ科 *Cornus officinalis* と規定している。中国でも山茱萸の同名異品はなく、本草經集注の記載もサンシュユと矛盾しないが、宋代の圖經本草の記載とはまったく合わない。木島正夫は本草学上の山茱萸の基原を不明とする[1)]一方、御影らはメギ科メギ属とバラ科カラミザクラを混記したものと解釈した[2)]。同じ「茱萸」の名をもつ呉茱萸・食茱萸はサンシュユとはまったく異なるミカン科を基原とするが、何故に山茱萸が同じ名で呼ばれるのか、考証されたことはなかった。本研究ではこの観点からサンシュユの基原を再考する。

【方法・結果】證類本草に二つの山茱萸の附図があり、一方はサンシュユとして許容の範囲であるが、もう一方は呉茱萸または食茱萸によく似る。證類本草の拾遺である本草衍義は呉茱萸とまったく類似しない山茱萸がなぜ茱萸の名をもつのか疑問を呈し、宋代になると本来の「茱萸」である呉茱萸等を充てる見解が登場する。結論からいうと、山茱萸の本来の名前は山朱茱であって、赤い実を櫻桃に見立て、その別名朱茱に因んでつけられたが、朱茱が茱萸に誤認されて山茱萸に転じたため、宋代の本草家を狼狽させることとなった。司馬相如賦に「山朱櫻は即ち櫻桃なり」、呉普本草に櫻桃一名朱茱とあるのを、陶弘景は胡頽子（グミ科グミ類）に見立てて可食と記載したことが混乱の要因となったと思われる。齊民要術に「山茱萸なれば則ち食に任へず」とあるので、6 世紀に早くもサンシュユ以外を基原とする山茱萸が登場したことを示唆する。以上の経緯は拙著「歴代日本薬局方収載生薬大事典」（ガイアブックス、2015 年２月）に詳述されている。

1）新註校定國譯本草綱目第 9 冊　木島正夫註（春陽堂、1979 年）、534 頁-535 頁。
2）御影雅幸・二木結果里　薬史学雑誌　43 巻　33-39　2008 年。